

## プリミティヴ・アートの変遷と今後の可能性を巡って —ツーリスト・アートとの関係性を探る

高田佳奈 (多摩美術大学)

---

本発表は、人間の根源的な業である「モノを創る」という行為から誕生したプリミティヴ・アートが本来どのようなものであったのかを理解するとともに、プリミティヴ・アートのさらなる可能性を探るために、ツーリスト・アートとの関係性を分析しながら今後の展望を考察していくものである。

今日、「プリミティヴ・アート」というと、「先史美術」や「原始美術」という表現を与えられ、「未開な地域の美術」とされることが少なくなかった。しかしそれは西洋による一元的な視座によるものであり、進化主義的、西洋中心主義的な価値観から与えられたものであるとも言える。この既存概念から脱却し、実際にはどのように捉えられてきたのかを検討するために、美術史以外の文脈で語られている言説を追い、その意味を多義的に考えていく。その際利用するのが、人類学の視点である。人類学の文脈を選択した理由としては、非西洋という周縁社会を明確に表象していくことを常に試みているのが人類学だと考えられるからである。

ところで、美術史の文脈においてプリミティヴ・アートが重要な位置を占めることはその歴史を紐解いていけば歴然である。ところが、プリミティヴ・アートの形成についてその見解をより明確に示しているのが J. クリフォードや吉田憲司、木村重信などの人類学に関わりを持つ人物たちの記述である。西洋において大航海時代が幕を開けたのち、旅行家や植民地行政官、宣教師たちは異国の珍しい造形物を本国に持ち帰り、民族学者たちは未開の調査地のモノを民族誌の標本として取り扱った。非西洋のモノは一般に、古代のモノあるいは古代人の遺物、エキゾチックな珍品として選別され、分類、収集されてきたのである。その後、19世紀末から20世紀初頭にかけてキュビズムやフォーヴィスムの作家たちが目をとめ、収集を始めることになる。それに併せて美術商も活動の範囲を広げていった。プリミティヴ・アートは、西洋の美術作家によって発見され、賞賛され、美術商によって売買され、コレクターによって収集され、美術史家によって語られ、美術館にオブジェとして展示されることで美術に仕立て上げられた。先に挙げた人物らは総じてこのような記述を残している。プリミティヴ・アートは呼称を変えながらも、世紀を通じて美術を巡る一連のシステムの中にかからめとられてきたということである。

以上の言説を受けて、プリミティヴ・アートの今後の動向を探るために、モノの価値を示す制度として J. クリフォードが提示した「芸術文化システム」を利用し、プリミティヴ・アートとツーリスト・アートの関係性を論じたい。プリミティヴ・アートが民族の境界線を越え、コミュニケーションツールのひとつとして機能することで、芸術と人々の持続的な関係性構築を可能にするのだという展望を検討していく。